

サントリー

サントリー美術館で「のぞいてびっくり江戸
 絵画―科学の眼、視覚のふしぎ―」展を開催
 江戸時代後期に花開いた視覚文化を紹介

東京・六本木のサントリー

なんと同時に顕微鏡や望遠鏡

美術館では3月29日から5月

など視覚に対する従来の常識

11日まで「のぞいてびっくり

を一変させる光学装置もまた、

江戸絵画―科学の眼、視覚

海外からもたらされるように

のふしぎ―」展を開催する。

なり、これらの光学装置をの

異国文化に大きな関心をも

ぞいたときの驚きや発見は江

ついていた八代将軍・徳川吉宗

戸時代の人々に大きな衝撃を

は享保5年（1720年）、

与え、新しい美術作品が生み

漢訳洋書の輸入規制を緩和。

出されるきっかけとなった。

その結果、西洋の科学技術・

当時、西洋の遠近法や俯瞰

文化を研究する蘭学が盛んに

図の技法は中国経由で既に日



名所江戸百景 深川洲崎十万坪

本に導入されていたが、より
 正確で直接的な情報を得られ
 るようになったことで、その

技術は飛躍的に向上した。遠

近法の一つである透視図法

（線遠近法）を駆使した「浮

絵」や、凸レンズの付いた視

鏡や、凸レンズの付いた視

鏡はその最たる例で、このほか

顕微鏡で観察したミクロの世

界にも強い興味が寄せられ、

西洋の博物学から得た知見を

活かし、対象を自然科学の眼

で捉えようとする写真図が多

数制作された。また、光学的

現象への興味は影絵や鏡・水

面などに映る映像への関心へ

と波及、その面白さに注目し

た作品も数多く制作された。

同展では、こうした江戸時

代後期に花開いた新しい「視

覚文化」を第1章「遠近法」

との出会い」、第2章「へ鳥の

眼」を得た絵師たち」、第3

章「顕微鏡」でのぞくミク

ロの世界」、第4章「博物学」

で観察する」、第5章「へ光

とへ影」を描く―影絵・鞆絵・

鏡・水面」の5章構成で、小



重要文化財「不忍池図」

田野直武、司馬江漢、葛飾北
 斎、歌川広重らの作品を通し
 て紹介しており、主な出品作

品は次のようになっていた。

なお、作品保護のため、会期

中に展示替えを行う。

【第1章】重要文化財「不忍

池図」（小田野直武、一面、

1770年代、秋田県立近代

美術館）、「縁端美人」（鈴木

春重〈司馬江漢〉、中判錦絵

18世紀末、東京藝術大学、「江

戸城辺風景図」（垂欧堂田善

一幅、18〜19世紀、東京藝術

大学）、「北斎漫画 三編」（葛

飾北斎、一冊、文化12年へ1



本草写生帖

島中良著
「紅毛雜
話」(森
人藏)、
本、個
5年再版
へ174

「第4章」
「本草写生帖」
(坂本浩然、一帖、天保
4年へ1833年)、西
尾市岩瀨文庫)、
「獸類写
生」(山本溪山、一卷、

彦根城博
物館)
【第3
章】「ミ
クログラ
フィア」
(ロバー
ト・フツ
ク、一冊
1665
年刊行
へ174
5年再版

年へ1787年、個人蔵、雪
華図説」(土井利位、一冊、
天保3年へ1732年)、古
河歴史博物館)、重要文化財
「雪華文蒔絵印籠」(原羊遊齋
一合、天保3〜11年へ1
832〜1840年)、
古河歴史博物館)、
「カル
ペパー型顕微鏡」(一基、
1737年頃、ユニオン
光学株式会社へ古河歴史
博物館寄託)

815年)、個人蔵、「名所
江戸百景する賀てふ」(歌川
広重、大判錦絵、安政3年へ1
856年)、個人蔵、「(反射
式)眼鏡絵三十三間堂図」
(円山応挙、一面、18世紀、
歸空庵コレクション)
【第2章】「江戸一目図」(鍬
形蕙齋、一幅、19世紀、個人
蔵、「名所江戸百景 深川洲
崎十万坪」(歌川広重、大判
錦絵、安政4年へ1857年、
個人蔵)、「鷹狩図屏風」(狩
野養信、二曲一隻、19世紀、
板橋区立美術館)、「洋人富士
山遠望図屏風」(岡田半江、
六曲一双、19世紀、個人蔵、
大阪府指定有形文化財「反射
望遠鏡」(イギリス製、一基、
18世紀、大阪歴史博物館)、「反
射望遠鏡」(国友一貫齋、一基、
天保7年へ1836年)頃、



カルペパー型顕微鏡

市岩瀨文
紀、西尾
市、19世
のうち二
一五五冊
木春山、
説」(高
乃岬」(歌川広重、大判錦絵、
安政4年へ1857年)、個人
蔵、「みかけハハるがと
んだい、人だ」(歌川国芳、
大判錦絵、弘化4年へ184
7年)頃、町田市立博物館、
鏡中図(さや絵 桜寧齋画集
のうち「桜寧齋」(一帖、寛
延年間へ1748〜1751
年)、メーテレへ名古屋テレ
ビ放送)、秋田県指定有形文
化財「富獄図」(小田野直武
一画、安永6年へ1777年)頃、
秋田県立近代美術館)



即興かげぼしづくし 根上りのまつ 梅に鶯